

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第 号
------	---------

氏 名 金田 明大

論 文 題 目

埋蔵文化財保護手法の開発・研究とその実践

論文審査担当者

主査 名古屋大学大学院人文学研究科 教授 梶原 義実
委員 名古屋大学大学院人文学研究科 教授 古尾谷 知浩
委員 名古屋大学大学院人文学研究科 准教授 中川 朋美

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

【本論文の概要】

本論文は、遺跡の発掘調査や埋蔵文化財の保護をめぐる諸課題に対して、その膨大な情報を迅速かつより正確に取得するための効果的な技術活用、とくに遺跡探査と三次元計測について論じたものである。

1. 序論では、筆者が文化財保護行政に携わった経験から、本研究に取り組んできた経緯が述べられるとともに、技術の長足の進歩にもかかわらず従来の調査方法が無批判に継承される現状に対して問題意識が示された。

2. 考古学、埋蔵文化財保護における現状と課題では、埋蔵文化財行政と学術研究という考古学の二面性をもつ課題についてまとめている。そのうえで、双方に共通する、研究の基礎データを残すという観点から、情報取得技術の重要性を指摘し、その現状と課題について論じている。さらに発掘調査における各作業工程に掛かった時間を調査記録から分析し、記録化過程の省力化が、発掘調査の効率化に繋がる可能性を指摘した。

3. 遺跡探査の方法とその実践では、発掘調査をおこなう前に遺跡探査をおこなうことの必要性・有効性について、具体的な事例をあげつつ論じている。とくに、地表面から把握が困難な官衙遺跡や窯業遺跡等においても、効果的な成果があげられていると述べる。その一方で、これらの手法が遺跡理解において特殊な技術であると捉えられている現状を批判する。

4. 三次元計測の方法とその実践では、考古資料の記録方法としての三次元の有効性が、日本考古学の萌芽期から示されていたが、それが近年の技術進展により克服され、効果的に使用可能になったと述べる。そのうえで、具体的な三次元計測技術の実践例を紹介するとともに、その評価にあたって必要な精度および確度について論じている。

5. 考察—考古学・埋蔵文化財保護における技術利用の可能性と課題では、遺跡調査の効率化について、これまでは遺跡の破壊を促進するという論理のもとで忌避されてきた現状をまず述べている。それに対して、適切な技術の活用を実践することで、単なる調査期間の短縮に留まらず、発掘現場でしか取得できない多様なデータを取得し、遺跡の理解を深める時間を考古学者は得ることができると論じる。さらに、これらの技術は、それぞれの市町村の埋蔵文化財行政機関が単独で保持することは難しいことから、複数の遺跡調査現場の支援を目的とした情報センター方式による遺跡調査を、東日本大震災時の復興支援現場での事例を踏まえつつ提言している。

6. 結語では、本論の成果をまとめるとともに、遺跡探査および三次元計測についての今後の方向性を提示し、これらの技術が埋蔵文化財保護の基礎的な手法として今後定着していくことを期待している。

【本論文の評価】

本論文は、奈良文化財研究所において30年以上にわたり埋蔵文化財行政に携わってきた申請者が、その間に必要とされ、また自身で研鑽を重ねてきた文化財探査技術および、近年急速に進展してきている三次元計測技術について、その重要性を論じたものである。

本論文は以下の点において高く評価できる。

まずは、考古学・埋蔵文化財行政における技術の重要性を、単なる事例紹介に留まらず、学問的にその有効性を検証していることである。埋蔵文化財行政の現場においては、申請者も述べるとおり、伝統的な考古学の経験則を墨守するあまり、現在の技術水準にあわせると必ずしも効果的・効率的とはいえない手法が、文化財を正しく記録保存する方法として使用され続けていることが多い。申請者はそれを、具体的なデータをもとに検証し、どの技術を使うことでどの程度の発掘調査工程の省力化が見込め、さらにそれが記録の正確性を損なうことなく、むしろ従来の方法をより充実させることを、事例をあげつつ論じている。それが単なる机上のデータからのみの解析や技術自慢ではなく、申請者の長年の文化財行政の経験と、遺跡探査の第一人者として積み重ねてきた多くの実績に基づくことが、議論の説得性を増している。

次に、論文全編において、技術的な専門性が高いものであるにもかかわらず、可能な限り平易な言葉をもちいて執筆されていることである。考古学は人文系の学問分野の中では伝統的に、理系分野を含めて他領域との学問的接点が比較的多い分野である。その際に課題となるのが、論者も述べる用語の違いによる互換性の喪失であるが、融合分野に精通した研究者とそうでない研究者の間においても、専門用語に関する理解度の高低が、相互理解を阻害していることが多いように思う。本論文は高度な技術について専門的に取り扱うものの、専門性の高い部分については可能な限り平易な言葉で、カタカナ語を排しつつ説明するという親切心が見受けられ、多くの考古学の関係者にとって読みやすいものとなっている。考古学という学問分野においては、その大部分を占める埋蔵文化財行政と大学の乖離は、避けるべきでありつつも常に課題となってきた。本論は考古学に携わるこの両者が等しく読める内容となっており、専門書としてのみならず、概説書としての出版が強く望まれる。

考古学研究において、考古学者自身が自らの技術体系がどのように継承されてきたかを学問的に振り返る研究は、重要であるにもかかわらずごく僅かに過ぎない。申請者は古代の土器研究でも卓越した業績を有するが、あえて本論を博士学位申請論文として執筆したのは、今後の考古学に対する申請者の真摯な危機感ゆえであろう。

以上により審査委員一同、本論文が博士（歴史学）の学位を授与するにふさわしいと認める。